GREEN Sketch

SPRING 1997

創刊号

CONTENTS

- ごあいさつ
- 鈴木哲理事に聞く
  時代を拓く みどりの都市づくり
- 座談会
  にいがたの花・みどりの都市づくり
- 新潟県緑花推進計画
- 第15回 全国都市緑化にいがたフェア
  にいがた緑のものがたり'98
- 植物に親しむ
- 県内緑化イベント情報
- 公園紹介
- (財)新潟県都市緑花センター
  事業概要紹介
- 職員紹介
- 助成制度の紹介
- 緑の愛護団体紹介

'96にいがた花絵プロジェクト

「GREEN Sketch」創刊に寄せて

財団法人 新潟県都市緑花センター
理事長 今岡　亮司

長寿・少子社会の到来、ゆとりと豊かさへの志向など21世紀への新しい時代潮流の中で“緑豊かで潤いのある都市づくり”が重要な施策の一つになっています。

こうした背景のもとで花とみどりのある生活を楽しむ、緑化の取組みを通してコミュニティの形成を図るなど、緑化に対する関心の高まりと共に多くの地域で魅力的な都市づくりが進められるようになってきました。

平成2年度に設立されました(財)新潟県都市緑花センターも関係各位のご支援ご協力によりまして、なんとか軌道に乗せることができました。今後は、県や市町村の行政だけでなく、企業や県民一人一人が日常不断に都市緑化に努める必要があります。

そして、今後さらに都市緑化を積極的に進めるためには、都市緑化に関する情報の提供や意見の交換が必要であろうと考えています。

そこで、当財団の事業や行政機関の施策、愛護団体の活動、県内の公園紹介、その他都市緑化に関する情報を提供するため、このたび、(財)新潟県都市緑花センターの情報誌＝「GREEN Sketch」を発刊することにいたしました。みなさまの期待に少しでも応えることができれば幸いであります。

平成10年には、「全国都市緑化にいがたフェア」の開催が予定されており、緑化の機運も高まっています。当財団も、県立公園や緑地の管理、都市緑化の普及啓発や推進保全等の事業を通して緑化の推進のため誠心誠意努力してまいりますので、読者の皆様におかれましても、花や緑の大切さを再認識していただき、緑化活動へのご理解とご協力の程よろしくお願いいたします。

1997年3月

鈴木　哲理事（新潟大学教授）に聞く

時代を拓く みどりの都市づくり

舞台はできた　これからは県民が主役

理事　新潟大学教授　鈴木　哲

緑の都市づくりの大切さが認識

「この10年間で新潟県の緑の都市づくりも大きく前進したように思うのですが、鈴木先生から見られていかがでしょうか」

鈴木：私が県の公園緑地の仕事を最初にお手伝いしたのは、たしか10年前ですがその当時に比して、新潟県の都市づくりも大きく前進したと感じます。私が関係した事業を通してもそのことを強く感じます。

「具体的にどのような点が前進したとお思いですか」

鈴木：花とみどりのある生活空間がどんなに素晴らしいものであるか、このことについて県民の理解が深まったことと、県や市町村が公園の整備や都市緑化に真剣に取組むようになったことだと思います。

緑の都市づくりの質が問われている

「ただ、一言で緑の都市づくりと言っても多くの課題があると思うのですが、その点どうお考えですか」

鈴木：たしか、新潟県は県営都市公園の整備が全国ワーストワンだったと記憶しているのですが、量的に遅れているだけに、出来るだけ早く量的な整備を進める必要があると思うのですが、同時に質も大切です。公共施設全部に言える事なのですが、特に公園緑地は都市のシンボル施設であり、文化施設・遺産であるべきです。そうした意味からも計画・設計にあたっては、地域の特性を生かすと共にデザインする必要があります。

県民主役の緑の都市づくり

「また、緑の都市づくりで一番大切なことは、県民が主体になって取組む事だと思いますが、その点で先生のお考えを聞かせて下さい」

鈴木：公共施設としての公園緑地の整備は行政が行うべきですが、都市緑化は基本的に県民が主体となって行うべきです。（財）新潟県都市緑花センターが発足して、都市緑化の普及啓発や都市緑化の取組みをしている団体等に助成をしたり、ご努力いただいているところですが、こうした取組みをさらに強める必要があります。

鈴木先生は、今年の3月に新潟大学を退官されます。鈴木先生には、右の年表を見ていただいてお分かりのように、この間、県の公園緑地行政に対し、また（財）新潟県都市緑花センターの業務に対し、何かとご指導・ご協力をいただきました。

今回は、この間の県の公園緑地の取組みを振り返っていただきながら、今後の緑の都市づくりについてお話をお伺いしました。

新潟県の公園緑地の略史

1986年（S61）　紫雲寺記念公園事業化決定

1987年（S62）.3　「大規模公園配置計画策定調査」
（鈴木哲先生が委員長として、取りまとめ
この調査が後に国営越後丘陵公園として実を結ぶ）

1989年（H 1）.6　金子清知事誕生
"新潟を日本のオアシスに"
公園緑地行政を積極的に推進

1990年（H2）. 3　「鳥屋野潟公園（総合スポーツゾーン）基本計画」策定
（鈴木哲先生も委員として参画
この計画が基本となり、H10の全国都市緑化フェア、
H14ワールドカップサッカーの開催地につながる
全国的に注目されるプロジェクト）

（H2）. 4　県の機構改革により県土木部に都市整備局、
都市計画課に公園緑地室設置

（H2）.10　「（財）新潟県都市緑花センター」設立
（鈴木哲先生　理事に就任）

1991年（H3）. 3　「新潟県都市公園等整備五カ年計画」策定
新潟県都市緑化植物園、大潟県営都市公園の設置決める
（原案策定のための調査・研究に鈴木哲先生参画
また、この時のランドスケープ研究会での
講師の話が後日「公園づくりを考える（技報堂発行）」
として出版される）

1992年（H4）. 3　「大潟県営都市公園基本計画」策定
（基本計画策定の委員に鈴木哲先生参画）

（H4）10　平山征夫知事誕生

1993年（H5）. 8　「鳥屋野潟公園基本計画見直し（案）」策定

1995年（H7）. 2　「第15回全国都市緑化にいがたフェア」開催承認
（鈴木哲先生「第15回全国都市緑化
にいがたフェア」実行委員会の理事に就任）

1996年（H8）. 1　「新潟県緑化推進計画」策定

（H8）12　「ワールドカップサッカー」新潟　開催地に決定

1998年（H10）. 8　「第15回全国都市緑化にいがたフェア」開催予定

2002年（H14）. 6　「ワールドカップサッカー」開催予定

太字：鈴木哲先生が直接参画されていた事項

【座談会】

女性のランドスケープ・アーキテクトが
新潟の都市づくりについて大いに語る

にいがたの花・みどりの都市づくり

岩崎　裕子
(株)グリーンシグマ

坂井　栄子
新潟県小千谷土木事務所・小出分所

保坂　桂子
(株)旅人木

横木　晴子
(株)漣環境計画

村田亜希子
(財)新潟県都市緑花センター〈司会〉

にいがたの緑
にいがたの風景を大切に新たな緑の創造に向けて

村田　皆さんが、花と緑をキーワードに、今の新潟を見て感じるのはどんなことでしょうか。私は、東京から来まして、東京は緑が少ないので逆に街の中に緑を増やすことに熱心ですが、新潟は周りに緑があるので却って街の緑に関しては無頓着なところがあると思います。

岩崎　私も新潟市に住んで長いのですが、緑が少ないですね。ただ、信濃川や鳥屋野潟のような広い水辺の空間があるのでそんなに少なく思えない。

村田　あまり意識させられないのでしょうか。

岩崎　あれが無かったら大変なことだと思います。あと、この頃思うのですが、綺麗な公園があるだけでいいのかな？と。広いにこしたことはないのですが、例えば、鳥屋野潟公園などもわざわざ出掛けていかなければならなくて、ふらっと立ち寄れるような公園は本当にないですね。近頃色々と、精神的にも庭や土に触れたりすることがとても効果的だという話をよく耳にするのですが、いざ、実行しようと思ってもできるところが全然身近になくて…。

新潟市のケヤキ通りは愛着があって好きです。あれももう何十年、三十年は経ってませんか、やっと市民権を得てきた感じですね。街路樹は何十年もかけて意識が育てられてきています。あれだけの緑陰をつくるための年

月といいますか、ただ新しいところにお金をかけて大きな木を植えれば良いのではなく、その木がずっとそこに在るという時間が重要なので、今あるものを大切にしていかなければならないと思います。

横木　最近、たまたま仕事で新潟市の都市緑化推進計画に関わりまして、今まで新潟市の緑を全く見ない仕事をしてきましたので、自分自身もこの業務をやってみて初めてわかったこともありました。やはり、村田さんが先程おっしゃっていたように、新潟の人は新潟には緑がたくさんあると思っていますね。私も、周りの人もそうですが、田んぼも皆緑だと思っていますし…。多分それは多くの人が共通して持っている新潟のイメージなのです。

ですが、改めて新潟市の緑の成り立ちを勉強しましたら、新潟は川が運んできた扇状平野なので森林がないという土地の成り立ちの歴史があるのです。私が小さい頃には、自分の身の周りには雑木林が今よりもっとあったのですが、便利さを求めた開発等で周りからどんどん姿を消しています。川辺・水辺の景色と今のその場所とは、全く違いますね。護岸整備がされて、大きな木が一本もなくて…その場所に立つと、昔懐かしい水辺の景色を思い出して、ここまで変えてしまう人間の力に物凄さというものを感じてしまいます。そして、"新潟にはもっともっと大きなボリュームを持った緑があるところが欲しいな"と生活する者として多くの人が思っているのではないでしょうか。今までは車社会でまだまだそういう傾向がありますけれど、自分が年をとってから車でなく歩いて散歩して楽しんだりできる環境がもっと整うと良いなと感じます。

保坂　私が今住んでいるのは、上越のインターチェンジの近くなのですが、昔は横木さんがおっしゃっていましたように田んぼにハンノキがずらっと用水路の脇にあって、あぜ道が砂利道で…そんなものが幼い頃の思い出でした。でも、今は本当に変わってしまいましたね。田んぼがほとんどなくなりましたし、森も少なくなりました。道も今はみんな舗装されてしまって、何もないですよね。東京に比べて、整然とした緑がないですし。

それでも、皆の心の中では田園風景が新潟の心のふるさと、というところがあると思います。実際、大手スーパーができて生活はそれまでより便利になりました。けれども、昔ながらの原風景を守りつつ生活面の向上もはかれたら、と考えます。

坂井　今年4月から小出に移ったのですが、まだ、田んぼの中に雪が一杯ありまして、なんてところに転勤してきたのだろうと（笑）でも本当に自然の真っただ中で身近に四季を感じられるところで、そこから久しぶりに新潟市に来ましたら、ここは自然や四季が感じられないのかな、と思いました。せっかく素敵な四季があるのに、割と都市部では四季を感じるところが少ないのはとても残念なことだと最近思うのですが。今日、昼に少し早めに着きましたので、白山公園でパンを買って食べていたのですが、市役所が近いせいもあるのでしょうけれど、結構サラリーマンの方が皆さんお弁当を広げて食べていらっしゃいました。こういう空間が新潟市の、定点的に

第9回新潟県都市緑花フェア（県立鳥屋野潟公園）

村田亜希子さん

保坂桂子さん

四季を感じられる場所でできるのではないかと思います。

村田　私も今の坂井さんの話に同感で、私は4月から県庁でデスクワークばかりで、昼間太陽の光を浴びることがないものですから、天気が良いと、県庁の森へ行ってシートを広げてその上で寝転がって日光浴をしていたりします。そうすると何となくエネルギーが湧きおこってくるような……人間、こういう所へこないと駄目なんだなと、すごく感じます。お昼休みですとか、都市の中ですと私のように外でお昼くらい食べたいという人も多分いると思うので、公園とまでいかなくても、ちょっとした空間が都市においては特に必要なのではないでしょうか。

保坂　全体に見ると雪が降るためか、緑に対する認識が浅いですね。

街路樹なども、つい最近までは「除雪の邪魔」等で、勿論それ一点張りではないし、努力されている方もずっといらっしゃるのでしょうけれど、最近やっと見直されてきた気がします。新潟市に来ると、上越よりもずっと緑が多いと思いますが、県全体を見ると、緑が少ないのはやはり自然の厳しさがあったからかな、という気がします。

長期的な視点に立った取組みが必要
緑の質が問われてきている

坂井　街路樹よりも、雁木とか、アーケードの方が冬場歩けるわけですよね。雨でも心配ないですし。最近はとりあえず道路・車ありき、で、道が通れるようになって、さて質を、と始めようとすると、今度は住民の方が「そんなものいらない」という事になったりして難しいですね。最初の計画の段階で、二年後三年後ではなく、十年・二十年・百年の、長い視点でのオーダーで考えていかないと、この先また同じようなことになる、と今造っている立場で考えているのですが中々そういうふうにはいきませんね。

横木　けれども、全ての街路に樹木が必要なわけではないですね。実際そこにすんでいらっしゃる方にとって買い物の問題や邪魔になる等それぞれの事情があると思いますので、全てが必要であるとは思わないです。ただ、有るべきところにはきちんと有って欲しいと思います。街路樹を入れるのが無理な所へ無理矢理入れることにも問題がありますので、全体の中で考えてなおかつ、必要な所へボリュームを持ってくる。有るところには有る、と、きちんとすれば、もっと都市の空間としては魅力があるものになるだろうと常に感じています。

村田　まちづくりという大きな視点で捉えないと部分的に見てしまうので、例えば道路でも、「今はこういう時代だから街路樹はセットにしなければいけない」等と、その町にそれが本当にふさわしいかどうかという議論も無しに入れているところがありますね。それで結果的に枯れてしまって、何のためだったんだろうと。

横木　そろそろ唯増やす、ということから視点を変える時代になってきたのかなと思います。

村田　「緑を増やす」という話になると、どうしても、人の生活基盤が確保された上で、ゆとりが出て、それからやっと緑に目が行く形になるところが、難しいことなのでしょうけれど、今実際に緑が減少している状況をみれば、生活基盤が優先されるにしても緑を増やしていくことも同時にやるべきですね。

それをどうするかが、緑花センター自体も市町村に助成を行っているのですが、市町村自体がそういうことに関心を持っていらっしゃらないと、なかなか住民の方に還元することも難しいですね。

岩崎裕子さん

岩崎　確かに個人レベルから見れば各人の関心には差がありますが、全体的には緑というものに対しては、阪神大震災の時から見直されて注目されていますね。被災した人には申し訳ないのですけれども、きっかけというか、存在を実感してもらえる機会だったのかなと思ったりもします。

　それと、街の中では、緑が欲しくて一生懸命住宅でやっている人もいれば、そうでない人もいますし、好きな人はプランターを外に出したりしますが、嫌いな人は全然手をかけない。「綺麗な花が咲きますよ。実が成りますよ」と、住民に序々に意識を浸透させていくことが必要なんでしょうね。例えば、家の近所をコミュニティ等で掃除をしたりすれば、それで目の向け方が違ってくるのではないでしょうか。

保坂　春の万代橋のチューリップは緑花センターさんが？

村田　うちでなくて新潟市です。駅前の「花絵プロジェクト」には協賛していますが。来年は信濃川に浮かべるそうで。

四季の花を生かす工夫
市民の参加が大切

岩崎　たしか市もそうですが、県の花もチューリップですよね。でもチューリップの時だけではなく、春・夏・秋で時々替えるのもいいんじゃないかと思うのですが。

横木　そういう花のことになると、管理の問題が出てきますね。私も、設計であげても、その後の管理計画が何も無いのでとんでもない状態になることも経験していますので、管理等も、これからは公共でもつくったところが管理していかなければいけない、というシステムを変えなければ、都市の中の美しい緑は保てないと思います。

　最近色々な雑誌でも園芸が取り上げられてブームになっていますね。先日、催し物で、園芸に詳しい方を紹介して欲しいというお話があったので、ハーブの講師をしていらっしゃる方にお願いしました。実際にお呼びしましたら、ハーブコーディネイター・アロマテラピー、更には樹医の資格まで取得した方で、参加した皆さんの尋ねることに色々と答えて下さったのです。多分、そのような方がまだまだたくさん潜在していると思います。これから個人の方が園芸をやっていく上で、すぐに答えを出していただけるような、相談ができる所が不可欠だと思うのです。そういった知識を持っていらっしゃる人を緑花センターさんだったら緑花センターさんが、アドバイザーとして登録する制度を作って、要望があった時に派遣していただくようなネットワークがこれからつくっていけるのではないでしょうか。

岩崎　きっかけと言いますか、そばに園芸に関して詳しい方が少ないですね。

村田　興味を持った初心者が、続けていくのに頼りになる人がいると全然ちがいますね。

横木　知らないことでつまずくことはかなりあると思います。最初のやる気はすごかったけれど続けていくうちに、分からないことを自分で解決できないでいると人間続かないですね。近頃はハーブはどう楽しむとか、どう使うかとか、どんどん幅が広がってきています。樹木の育て方だけでは対応出来なくなってきているので、知識を持っている方をもっと世の中に紹介するような制度があればなぁと思っています。

保坂　上越市の道路にも花などを皆さん植えるのですけれど、次の年にはどうもダメで、「やっぱりダメか」という感じを持っていました。でも、「管理できないからダメだ」とめげずに、さっき横木さんがおっしゃっていたように住民参加で専門家の方と一緒にやらないと、花や緑は育たないと思いますね。新潟にも、助成金等でそういう経験を積み重ねて、十年後に綺麗に咲くように見込んで育てていくものが生まれれば、ちょっと大層かもしれませんが、自信になると思うのです。

橋本晴子さん

ただ、皆さんのそれぞれの力添えと色々な協力がないと難しいものがありますね。その先頭に緑花センターさんがいて下さると本当に有難いのですけれど。

横木　そこに行けば何か教えていただけるとか、そんな仕組みができているとすごくやりやすくなるというか、幅が広がると思いますね。

花とか緑とか、女性が注目されるのは、やはり生活の中での楽しみ方にあるので、どうしても女性的な視線になるからでしょうね。ただ、庭については男性も多いですね。

岩崎　管理の面で、そういう人たちとも協力体制をとると、上手く管理費を抑えられて、認識が高まって、一石二鳥になるのではないでしょうか。新潟市でも市民農園で申し込み数が非常にたくさんあって、潜在的なものがあるのですから、上手い具合にそれを掘り起こすことが必要だと思います。

横木　どこででしたか忘れてしまいましたが、女性の庭師の会がありまして、公共の公園空間が草茫々になっていたのでその土地をお借りして自分たちで何か育てて花でも植えよう、という話を管理者にしましたら、公共の土地として個人にそういうことはできません、と言われたそうです。それでも最終的には実現したのですが実現するまでのプロセスがかなり大変だったそうです。花壇の構成も皆さんで考えて、花壇を造ったそうです。そしてその花壇に「この花壇の維持管理に参加されたい方はいつでもどうぞ」といった看板を立てて、住民参加の形をとったわけです。

公共の場で管理が行き届かなくなることはすごく多いですね。ですから、そういう動きがもっとあると、これから良いと思いますし労力をただで提供することは、公共側にとっても有難い話だと思うのですが。

坂井　産業振興センターのフラワーウェーブに行ったのですが、あの時花で色々造っていましたね。ああいうものを中でなく外でできたらいいですね。管理や造るのが難しいでしょうけれども、季節毎・月毎に作品があるとか、そんな感じにすると公共の緑も楽しいでしょうし。

村田　「見る楽しみ」と、造る人からすれば「見られる楽しみ」がありますね。人に見てもらいたいという意識があると思います。地道な活動にセンターがちょっとスポットをあててあげることで、意識の高まりを押し上げていけるのではないかと思います。

岩崎　（花や緑を）あんまり嫌いだという人もいないでしょうし。

村田　余程、苦い思い出があるとか。（笑）

横木　万代橋は、お天気が良かったりするとけっこう人が歩いていますね。歩いてもらうことは、色々なことが目につきますし、街をきちんと見てもらえます。ここが良いとか悪いとか、車のスピードではそこまでは見れませんね。だから、歩いて楽しい街ができると緑もとっても目につくようになるのではないかという気がします。道路の方も、歩道の幅員も前は一・五mでしたが、やっと最近広くなってきましたね。

岩崎　人に優しいとか言いますけれど、歩いて色々な風景に目がいって楽しいところなら歩きますよね。

保坂　そういうこともけっこう大切なんですね。家の子供が社会科で『緑道』はどれでしょうって言われてわからなかったんですよ。上越にはないものですから、何だろうって。（笑）

やっぱり歩いていて安全で楽しめて、という所が本当に必要ですね。

坂井栄子さん

国道403号線（通称フラワーロード）

夢 自分の公園をつくりたい ゆとりのある緑のまちに

村田　一番最後ですが、皆さんのこれからの新潟のまちづくりに関する夢を語っていただきたいと思います。

坂井　今日は色々と皆さんからお話を聴いてこれから参考にしていきたいと思います。自分の夢としては、自分で公園を造りたい、というものがありますし、たまに自転車に乗ったりするので、自転車でも安心して走れる道を作りたいとも思います。都市間連絡道路とか、ヨーロッパの方では自転車旅行が流行りみたいですよね。自転車は歩行者よりは速いし、使える乗り物ですけれど、車からみれば弱者の乗り物です。普段足として利用できるようになれば、もっと、街に買い物に行くにも自転車の方が便利ですし、動き易いという点では車より良いのではないかと思うのでそういう道づくりをしていきたいです。

保坂　新潟県、ということを考えると、どういう緑かというと、田園風景や、そういう暮らしの中にある緑をいかに守っていくかということが大切で、そういうものを残していけるように、私も上越でやっていきたいと思っています。

横木　私も保坂さんのように、一つはやはり残り少なくなったけれど、昔からある風景を守っていくことと、自分の仕事で関わっている公共の空間等、今、時代の要請でとにかく色々なことが求められていますね。防災上の機能とか、景観的なことや、福祉の面、更には人以外の生物をどう取り込んでいくか、保全したり、失ってしまったものをどんなふうに再生させるのか等、色々なことが求められています。到底一人では解決できないことですね。ですから、一つ一つ、自分なりのできることから色々な方面の力を集めて造っていかなければと考えています。

岩崎　私は元々新興住宅地のような所で育ったのですけれど、今はそこが開発で右往左往していまして、本来ならば代々暮らしていた筈の住民が暮らし、住み続けられる町というのはどんな町なのだろうかと、とても疑問に思っています。どんどん変わると同時に住み続けられる町、お祖母さんもお母さんも暮らしていた、という心のよりどころのある町をつくるには、どうしたらいいのかと考えています。そのためにも、ゆとりのある、緑のある町にしていきたいです。

村田　今日は皆さんのお話を伺いまして、私自身、刺激になりました。こういう色々な緑に携わっている方々が女性である、ということで励みにもなります。

私自身、仕事についてまだ5年目なので、まだ具体的な構想はないのですけれども、坂井さんがおっしゃっていましたように、公園といいますか、庭といいますか、自分なりの思い描く空間を造ってみたいな、という気持ちがあります。それがいつ実現するかわかりませんが、今現在緑花センターというところにいますので、自分自身としてはやはり緑や花を生かしたまちづくりをしていきたいと思っています。

今日は長時間ありがとうございました。

この座談会は、平成8年10月29日、白山会館で行ったものを事務局がまとめたものです。

（文責　事務局）

この座談会は、現在、新潟県内で活躍されている女性のランドスケープ・アーキテクトの皆様にお集まりいただき、平成8年10月29日に白山会館にて行ったものです。

誌面の関係で全ての内容をお伝えできないのですが、さすが女性ならではの都市づくりだなと感じる点も多くあったのではないでしょうか。

参加された方々のますますのご活躍を期待しております。　(Y.M)

植物に親しむ

アマリリス

毎年新しい品種が出回り、いろいろな色や形を鑑賞できることから人気の高いアマリリスについて、紹介します。

ミネルバ

●アマリリスとは

アマリリスは、ヒガンバナ科の球根草花です。アマリリスという名前は、南アフリカ原産のアマリリス・ベラドンナという球根草花から付けられていますが、普段、私たちがアマリリスとよんでいるものはヒッペアストラム属の植物を示しています。つまり、アマリリスというのは俗称なのです。

◆花ことば「誇り、華麗な美しさ」

人気の品種

- ●アップルブロッサム（白に淡桃）
- ●ミネルバ（赤に白すじ）
- ●レッドライオン（濃赤）
- ●ダブルレコード（白に桃すじ）
- ●モンブラン（白）◌オレンジソベリン（橙）

●栽培方法

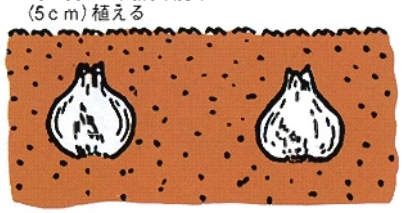
冬期の室内用として秋から出回る鉢に植えられたセットものもありますが、ここでは、春に球根を植え付ける場合の栽培方法を紹介します。耐寒性の弱い品種は、鉢植えにします。

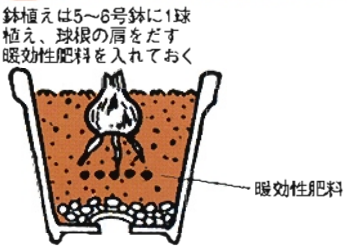
①植え付け時期

暖地では3～4月ですが、寒冷地である新潟県では4月下旬から5月上旬頃が適期です。

②植え付け方法

直径20～25㎝、深さ30㎝程の植え穴に、堆肥や配合肥料を入れ上土をかけて、球根が5㎝程覆われるくらいに浅く植え付けます。植え付け間隔は20～30㎝とします。鉢植えの場合、直径が球根の2倍程度の素焼き鉢を使い、水はけのよい土に暖効性肥料を混ぜ、球根の上端が出るように植え付けます。



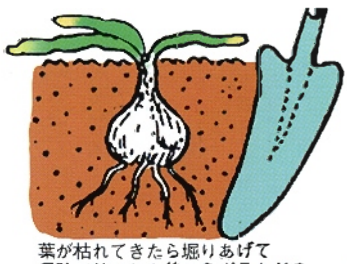


③管理方法

種子を採取しない場合は、花が終わり次第、早めに花首を摘み取って球根を育てるようにします。水はけと日当たりのよい場所を好み過湿を嫌いますので、土の表面が乾いたらたっぷりと球根や葉にかからないように静かに水やりをします。

肥料を好むので、花後の夏から秋にかけて、肥料を施して球根を肥らせます。また、この時期に発生する葉に赤褐色の斑点が出る赤斑病には、ベンレート剤などで早めに防除します。

葉が枯れてきたら球根を掘りあげて日陰で乾燥した後モミガラなどの中で貯蔵します。耐寒性の強い品種（在来種）は、掘りあげずにワラなどをかぶせて凍らないようにして越冬させることもできます。鉢植えの場合は、葉が枯れてきたら水やりをやめて、乾燥しないように鉢植えのまま、新聞紙等で包み、室内の暖かい場所で翌春まで保管します。

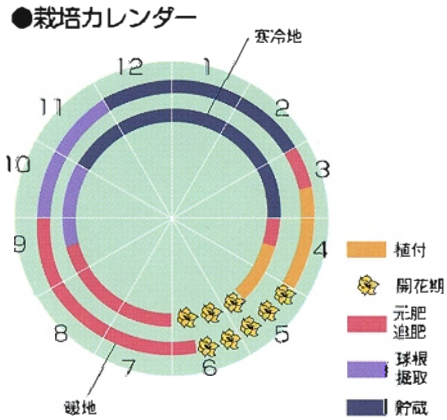


葉が枯れてきたら掘りあげて日陰で乾かした後モミガラなどの中で貯蔵する

在来種はワラや土をかぶせて冬越ししてもよい

開花後に化成肥料を与え敷きわらをする

●栽培カレンダー



アップルブロッサム